



中华
史学
文库

日本 近世新法家研究

韩东育 著



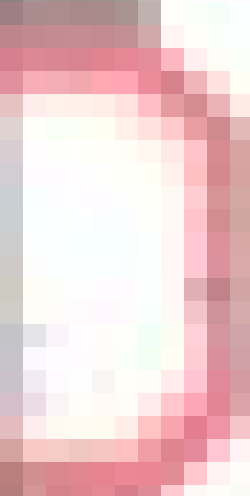
中华书局





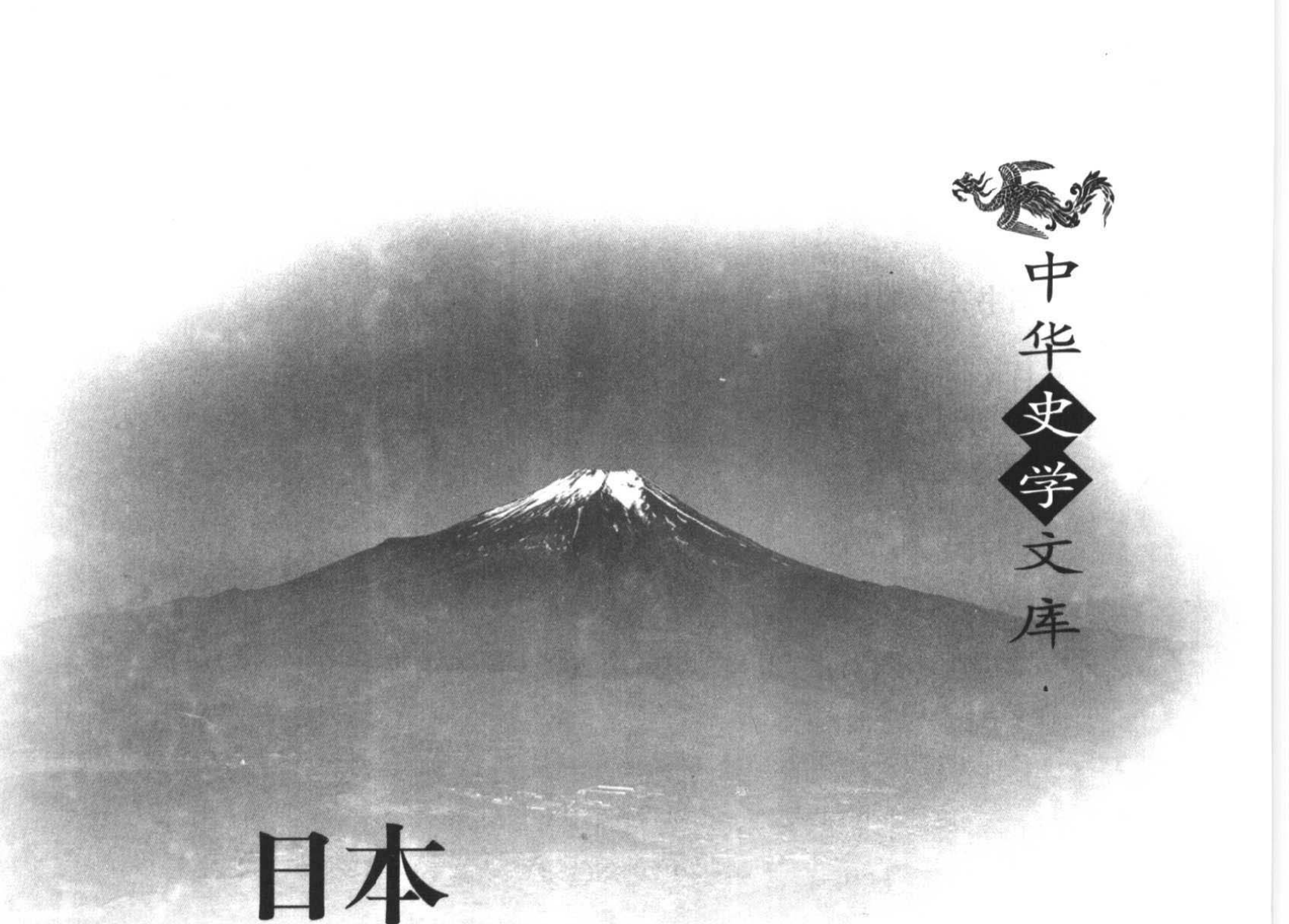
日本 經濟學研究

一九四一年





中华
史学
文库



日本 近世新法家研究

韩东育 著

中华书局

图书在版编目(CIP)数据

日本近世新法家研究/韩东育著. —北京:中华书局, 2003
(中华史学文库)

ISBN 7-101-03632-5

I. 日… II. 韩… III. 哲学思想—研究—日本—近代
IV. B313.4

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2002)第 097827 号

责任编辑: 宁映霞 李静

中华史学文库

日本近世新法家研究

韩东育 著

*

中华书局出版发行

(北京市丰台区太平桥西里 38 号 100073)

北京市白帆印务有限公司印刷

*

880 × 1230 毫米 1/32 · 13³/₄ 印张 · 1 插页 · 305 千字

2003 年 1 月第 1 版 2003 年 1 月北京第 1 次印刷

印数 1-3000 册 定价: 23.00 元

ISBN 7-101-03632-5/K · 1527

序 文

本書はきわめて重要な書物だと私は信じている。しかし序文を書くには少し躊躇がある。というのは、書物の出版は「公共的」な事柄であるから、その内容はどんな人にも開かれ、誰もが同じ資格をもって知的に議論できることが望ましく、ゆえに著者以外の者が名前を書物に加えてこれを外から意味づけることはよくない、とも考えられるからである。ただ、個人的な意味で、著者と深い縁をもつことができた同じ一人の研究者として、私がこの書と著者が与えてくれたものの悦びを述べることは許されるかもしれない。また内容的な意味では、荻生徂徠思想の意義は、中国ではもちろん日本でさえも一部の知識人以外にはあまり知られていない。そのためこの労作の投げかける意味も十分に理解されないかもしれない。その障壁を除くために、この機会に、読者の方々の理解を助ける言葉を少し加えるのは、日本思想研究者として私のある程度の義務でもあろう。

近代以前の日本には、文学や芸術だけでなく、かなり興味ぶかい思想の伝統が展開してきた。それは簡単にいえば、日本における民俗的な生活世界の思想に、中国大陸・朝鮮半島から伝えられた文字文化——儒・仏・道他の様々な思想が加わって、歴史—社会性を帯びながら構成されたものであった。その思想の構成においては、中国大陸から離れた島国であった日本では、「距

離作用」のおかげで興味深い現象が生じた。すなわち日本思想は、もとの中国で思想が構築された秩序や順序を問わないで、種々の思想を比較的自由に配合して発展することがあったという点である。たとえば、道教の一部が日本の「固有神道」の中にいつの間にか入っていたり、中国では廃れた禅仏教が、日本では残って現代でも盛んに行われたりするの分りやすい例である。また日本には、中国古代のどこかの言語や習慣が伝わって残っていたり、あるいは、たとえ直接伝わったのでなくともそれと類似並行した古代的なものが残存するなどといったこともある。

このような条件は、朱子学が本格的に行われた近世日本においてもおそらく働いていた。当時の優秀な儒学思想家は、自分たちの思想を構築する際に、宋元明の思想を一挙に自由に享受したばかりか、またさらにしばしば古代思想を受け継ぐこと（古学）を標榜した。そして中国の儒教的伝統における正統性には捉われず、優れた経学者であつても諸子学を研究し、時には儒教以外の思想・宗教を拘りなく研究・受容することもあった。こうした態度は、日本儒学の開放的・実地的なあり方を形成することになるのだが、その動きの徳川中期の一つの極限的な達成が荻生徂徠学派の思想である。それが本書で著者がまさに扱う「日本近世新法家」である。

著者が見事に描き出しているように、荻生徂徠は当代随一の大学者であつたが、孟子系の観念論を嫌って、荀子や韓非子・老子等との対話の中から、具体的・実的に社会を運営する道を作り出した。理想主義は、現実と適切な結び付きをもつときは、正義や仁愛を追求するよい力動をもたらすが、ただ観念的な建前になるときは、現実をほどよく制御できないまま権威主義や

逃避・欺瞞を生み出す。徂徠は、当時の武士政権においては朱子学の観念論は後者の意味しか持たないと考えていたのであろう。彼はより具体的な現実をコントロールする方法を求めて、歴史や諸子学に踏み込んだのである。そこに構成された経世思想は、現実主義的で、経済や政治・人間組織等についての(現在の言葉でいうと)「公共政策」ともいうべきものだった。それは、多くの非正統的な儒学や様々な古今の思想要素を大いに学んでいる。しかし、商品経済との対応がより主題化されている点、君主権を強調するよりも民衆の人情を配慮しようとする点などはやはり近世的である。この徂徠派の思想は、学問論・経世論として近世後期に広く影響を与えた。その意味で、徂徠派は、近代日本を準備した大きな儒学的資産の一つであった。

従来の思想史研究は、徂徠学派を、西欧の理論との対比によってよく位置づけてきた。しかしそれは、一見、立派に一貫しているようでも、実際の思想史とはとんでもなくズレた虚像が描かれていることも少なくない。これに対して、著者は、徂徠たち自身の言説に即し、彼らの学んだ中国の思想的源泉との関係を詳しく論及しつつこれを明らかにした。徂徠学派は、著者の手によって始めて、東アジアの思想資産との関連から正しく蘇ったのである。読者は、そこで、古今にわたる思想の力が、かくも生き生きと流れ再形成され続けるものなのか、驚かずにはいられない。思想のその普遍的な流れや形成力は、特定の時代や国家によって断絶した現代人は忘れてしまっている。しかしそれはやはり今も、またおそらく将来も、再発見することができるのである。

最後に、個人的な事柄を記させていただきたい。本書は、

東京大学大学院総合文化研究科の博士学位論文にもとづくもので、私は著者韓東育氏の大学院博士課程時代の指導教員であった。博士学位は、現代では比較的容易に発給される場合も少なくない。しかし東京大学の博士学位の取得はとても困難で、様々な専門家たちの眼をくぐる総合文化研究科ではとりわけそうである。言語にハンディの無い日本人でも多年月をかけて取得できないことも少なくない。その学位を、東育君は3年余で得た。その間の彼の勉学・研究が、恵まれない環境のなかでいかに激しい熱意に充ちたものであったか、私はエピソードとともに記憶している。また、学内外で日ごろ行われる自由な討論に、東育君はいつも、中国哲学・歴史の豊かな学識だけでなくおそらく東北人特有かと思われる素朴さと正義感をもって参加してみな議論を盛り上げた。現代の利益社会を知らないかのように所持された、彼の本当のものに向けられる情熱、真実さを私は忘れることができない。その真率さが、おそらく本書のテーマを彼に発見させたのだろう。しかし私の方は、その真率さから、中国で黙々と生きる人々の根底にある「徳」にふれることができた気がした。また、「東アジア思想」が歴史の実体としてあり、そこに分け入り長短を反省することで、その資産を将来に生かすことができるに違いないという見方や確信を得ることができたのも、やはり東育君が私に与えてくれた貴重な贈り物である。私は本書の刊行を慶びとする。そしてこのような著者の営みと本書のもつ重要な視角とが、次の新しい世代の東アジア思想文化を生む契機となることを心から願っている。

黒住 真(東京大学教授)

二〇〇二年六月二十二日 東京にて

序 言

我确信,这是一部极其重要的著作。只是,当提笔为它撰写序言时,却又颇费踌躇。这样讲,是因为书籍的出版乃“公共”事业,书的内容会展示给所有的人,而且任何人也都希望能够以同等的资格对其进行知识上的议论,所以我总觉得将作者以外的名字嵌入著作本身并从外部附加某种意义的做法,并不妥帖。然而,从个人的角度讲,由于我曾与作者间有过甚深的学缘关系,加之我自身也是此类问题的研究者之一,所以,由我来表达该书的出版及其作者所能带给我的喜悦心情,或许会被大家所谅解。而且,就内容本身而言,徂徠学派思想的意义,不惟中国,即使在日本,除部分知识人外,也并非所有人都有太多的了解。所以,对于投入如此气力而进行的这项研究,其意义,也许未必能获得人们的充分理解。为了清除这一壁障,我想借此机会写上几句有助于各位读者理解这项事业的说明,权作一个日本思想研究者所应尽的某种程度的义务。

近代以前的日本,除文学、艺术外,还形成过一个能使人产生浓厚兴趣的传统的思想。约略言之,即:当日本民俗的生活领域思想中注入了来自中国大陆和朝鲜半岛的文字文化——儒、佛、道等各类思想后所形成的具有“历史—社会性”的思想传统。在此过程中,一个形成于“距离作用”的惹人注目的现象,发生在远离中国大陆的岛国——日本。它集中体现在日本的思想不问原本产生于中国的思想本身所固有的构成秩序和顺序,而能够对各种思想进行

比较自由的组合和发展这一特点上。比较容易理解的,像道教的部分内容,就融入了日本的“固有神道”中,而在中国已经被废弃了的禅宗佛教,却被保存于日本,甚至在今天,仍十分盛行。而且在日本,依然存留着来自中国古代某地的言语和习惯,或者,即便不是直接舶来却与之类似和并行的古代文化现象,亦有相当的遗留。

上述条件,在朱子学正式风行日本的近世,恐怕依然在发挥作用。当时,优秀的儒学思想家在构筑自己的思想体系时,不单自由地受用了宋、元、明的思想,还日益不断地继承了更古的思想,并将这种学术标榜为“古学”。重要的是,这里已经捕捉不到中国儒教传统中的正统性。即便是优秀的经学家,亦开始把研究视角投向诸子学。当他们在研究并接受这类思想和宗教时,有时已经不再顾忌其是否还属于儒教范畴。这种态度,客观上催生了日本儒学开放而务实的理论形态,而这一变动在德川中期所能达到的极限之一,便是荻生徂徕学派的思想。诚如作者在书中所指出的,即“日本近世新法家”。

正像作者的出色描述所显示的那样,荻生徂徕是当时一流的大学者,然而,他嫌恶孟子一系的观念论,并在与荀子和韩非子、老子的对话中,创建了具体而务实的社会运营之道。当理想主义与现实两相契合时,前者可以为正义和仁爱的追求带来动力;可是,当理想主义只成了观念上的原则时,便会产生无法有效控制现实局面的权威主义和逃避与欺瞒。在徂徕看来,当时流行于武士政权中的朱子学观念论,恐怕也只剩下了后一种含义而已。正因为要探求更为具体的现实制御方法,他才步入了历史和诸子学领域。由此而形成的经世思想,是现实主义的,(用今天的话来讲)则堪称为关乎经济、政治以及人类组织等诸多方面的“公共政策”。其中,显然吸纳了大量的非正统儒学和各式各样的古今思想要素。但

是,应对商品经济时被日益凸出的主题,即,比起强调君主的权力,更应关注民众的人情这一点,却毕竟是近世式的思考。徂徠学派的这一思想,作为学问论和经世论,给近世后期带来了广泛的影响。从这个意义上说,徂徠学派已成为孕育近代日本的广义上的儒学资源之一。

以往的思想史研究,多将徂徠学派定点于可与西欧理论进行比附的位置上。然而,看上去气派而一贯的说明,很多都属于与实际的思想史大相径庭的无稽之谈和虚构。与此不同,作者根据徂徠本人的言说,通过对学派诸子与中国思想源泉间关系的详细梳理和不断论证,才使问题的真相得以明朗。徂徠学派经由作者之手,首次从它与东亚思想资源的相互关联中得到了正确的复原。这里,读者对于穿越古今的思想力何以会生生不息地绵延不绝和再形成,或许会感到震惊和不可思议。实际上,思想的这种普遍流向和形成能力,正在被为特定的时代和国度所隔绝的现代人所遗忘。然而,即便在今天,甚至哪怕是将来,上述情况,也将会被再度发现。

最后,请允许我写上几笔有关个人的事。本书在东京大学大学院综合文化研究科博士学位论文的基础上修订而成。我本人是作者韩东育氏大学院博士课程时代的指导教师。在现今时代,博士学位比较容易获得的情况,并不少见。但是,东京大学博士学位的取得,却异常困难。在集中了各类专家富于挑剔眼光的综合文化研究科,情况尤其如此。即便是没有语言障碍的日本人,入学多年而不能如愿者,亦不在少数。而东育君仅用去三年多一点的时间,便摘取了这一桂冠。此间,他在并不优裕的环境里是以怎样的激情和执着来从事他的学业和研究工作的片断往事,至今仍保留在我的记忆中。在大学内外平日举行的自由讨论会上,东育君总

能以他丰富的中国哲学和历史学识以及大概是东北人所特有的素朴感和正义感,将大家的议论推向高潮。他身上所具有的那种对现代利益社会全无觉解、而肯于对真实事物作忘我投入的热情与真诚,令我难以忘怀。也许正是这种率真,才使他发现了本书的题目。至于我本人,则仿佛从这种率真当中,触摸到了潜藏于默默生息在中国大陆的民众心底之“德”。而且,我由此而获得的“‘东亚思想’作为历史的实体而存在着,通过对它的分疏和长短反省,必能使这份资源再生于未来”的观点和信念,也正是东育君惠赠给我的珍贵礼物。我对本书的刊行,感到由衷的高兴。并衷心希望这样一位作者的劳作和本书所提供的重要视角,能够成为创生未来新时代东亚思想文化的一个契机。

黑住 真(东京大学教授)

二〇〇二年六月二十二日 于东京

目 录

序 文(日).....	1
序 言.....	5
序 章 徂徕学发生的历史前提与学派研究史考察.....	1

第一部 荻生徂徕——“脱儒”经世学的形成

第一章 徂徕学的思想“祖型”与理论“祖型”	33
引 言	33
第一节 徂徕学发生的个人背景	34
1.南总体验与“人情”的发现	34
2.仕宦生涯与政治的发现	42
第二节 徂徕学的“脱儒”性格	46
1.徂徕自身、批判者及研究者的议论	46
2.徂徕自身行为中的非儒教性格	54
第三节 关于徂徕学的理论“祖型”	59
1.有关徂徕学“祖型”的诸家说	59
2.对“荀子祖型说”的反论	61
3.对“祖型”的再认识——以《读荀子》为核心	68
小 结	72
第二章 徂徕的“脱儒”命题与方法论	73
引 言	73

第一节 徂徕的命题与“脱儒”过程	73
1.从“人性论”到“人情论”	
——性·情分离与“气质不变化”	73
2.从“仁论”到“礼论”	
——政教分离与“政治优位”论	92
3.从“天论”到“人论”	
——“天人分离论”与“人间优位论”	101
第二节 徂徕的方法论及其意义	108
1.“物”的溯及	108
2.“古今鉴照”的方法及其渊源	113
小 结	118
第三章 徂徕经世论的自我矛盾	119
引 言	119
第一节 “徂徕经世学”理论上的自我矛盾	120
1.变易的历史观与封建制复古	120
2.“私”“利”的肯定与“抑商”·封建道德	128
第二节 关于徂徕理论内在矛盾的内容分析	134
1.“圣人之心”与“圣人之制”	134
2.政治的发现与新经济的未发现	140
3.“人情论”的再度伸展与新制度的初步探索	145
小 结	151
第二部 太宰春台——“脱儒入法”的进一步展开	
第四章 太宰春台的“人情物理”论与法家哲学的展开	153
引 言	153
第一节 “人情论”与春台思想的“脱儒入法”	154

1. “人情论”和对法家的接近	154
2. 终极关怀与礼·法思索	159
第二节 原理的再建与“物理学”	164
1. 从“性理学”向“物理学”的蝉蜕	164
2. 《易经》与“物理学”的形而上升华	167
第三节 历史观与法家思想的展开	176
1. “时”的再确认与“圣人之道”的危机	176
2. “礼无定体”说与“礼废法兴”	181
3. 制度改革论与对徂徕的超越	184
小 结	188
第五章 太宰春台的经济策与理论体系的自我矛盾	190
引 言	190
第一节 对世态的清醒洞察	190
1. 关于“衰世论”的本质	190
2. “方今人寰,只金银之世界”	194
第二节 经济制度的改革与“富国强兵”	198
1. “藩营经济”的振兴策	198
2. 对“强兵”策的摸索	202
第三节 春台理论中的自我矛盾	205
1. 复杂的“圣人之道”	205
2. 封建制赞同及其矛盾	209
小 结	213
 第三部 海保青陵——“日本近世新法家”的完成	
第六章 海保青陵与“日本近世新法家”的完成	215
引 言	215

第一节 彻底“合理主义”的登场·····	216
1. 青陵“合理主义”的诸家说与“完全脱儒”·····	216
2. 青陵“合理主义”的进路和“与法家同调”之间的 内在逻辑关联·····	223
3. 韩非对《老子》的“理”论阐释与海保青陵 “以法释道”的“合理主义”·····	228
4. 关于“以法释道”的方法·····	240
第二节 “合理主义”的全面展开和 “新法家”的最终形成·····	249
1. “理”的“合点论”与“利”“理”合一·····	249
2. “人情好利”与对儒教“人性论”的彻底否定·····	256
第三节 对旧说的超越及存在的问题·····	264
1. 对旧徂徕学的超越·····	264
2. 对原始法家的超越·····	270
3. 对后世的影响及存在的问题·····	274
终 章 “徂徕派经世学”所见之学术关联及其意义 ·····	279
第一节 思想家们学说间的相互关联·····	280
1. 徂徕的理论“祖型”、贡献、地位及其理论极限·····	280
2. 太宰春台由“儒”到“法”的疾进与 “合理主义”的再建·····	282
3. 海保青陵的彻底“合理主义”与 “脱儒入法”的完成·····	284
第二节 “日本近世新法家”的独特性·····	286
1. 时代的“新”·····	286
2. 观念的“新”·····	286
3. 作用的“新”·····	287

附论一 原始法家概论——兼说徂徠学的法家关联	289
引 言	289
第一节 原始法家的发生背景	289
1. 商品经济的发展与“利意识”的渗透	289
2. “四民”体制的解体与宗法封建制的崩坏	292
3. 对意识形态的质疑	296
4. 徂徠的有关论述	300
第二节 原始法家的沿革及其命题	303
1. 法家的沿革及内容	303
2. 荀子与韩非子之相互关联	306
3. 法家的命题及其特色	309
第三节 日本的法家著作及其思想评论	318
1. 荀子的著作与思想	318
2. 韩非子的著作与思想	319
附论二 关于先秦时期的“人情论”	
——对法家合理主义的新诠释	321
引 言	321
第一节 人性论的问题所在	322
第二节 “人情论”的基础内涵	328
第三节 “人情论”的哲学渊源与“道理论”	337
第四节 《性自命出》与法家的“人情论”	343
第五节 一点思索	347
附论三 中日两国道德文化的不同择向与初步比较	351
引 言	351
第一节 日本人“礼”重于“仁”的道德择向	351
第二节 荀子的道德观与日本人外在“礼”的选择	357